

シンポジウム： 地域社会でまると家族を支援する活動への模索

座長：鈴木 和子 元東海大学健康科学部看護学科
高橋 真理 北里大学看護学部

本学術集会のメインテーマ「地域社会とつながる家族看護実践・教育・研究」を受けて地域社会でまると家族を支援する活動を模索・展開中の4人のシンポジストにそれぞれの領域での活動の意図や今後の課題についてお話していただき、参加者たちが家族看護活動を地域に向けて展開するためのヒントを得ていただくという企画のシンポジウムである。

最近、格差社会という用語が定着し、わが国で家族に関する事件が多発するようになり、家族をめぐる現実には厳しくなっている。そのような家族を取り巻く社会的背景を時代的、社会的文脈でみて家族看護の方向性をさぐる必要があるという趣旨で学会とシンポジウムのテーマが必然的に決まった。このことは、本学術集会会長が長年関心を抱いてきたテーマでもあり、これまで必要とされながら、なかなか正面から取り上げることのなかった課題でもある。

家族の著しい変化については、戦後、家族規範や宗教などによる社会的規範による抑圧が弱まって、それに代わる確固とした規範も宗教観も確立されないために、家族内の若者たちが拠り所を失っていること、伝統的な家族形態が多様化すると同時に、家族内部の凝集力や解決力が弱まってきていることが主な論点としてあげられている。そして、家族機能を外から補強する社会的な支援として、介護保険制度をはじめ様々な保健医療制度が創設され、後期高齢者医療制度をはじめとする健康保険制度の改革が行われているが、実際には、未だ一般の人々のニーズに沿っていないという声が高く、混乱期の様相さえ呈している。さらに、それらの公的な制度と家族内の機能を補完するものとしての地域社会のサポート力（いわゆるパブリックファミリーズム）も殆ど期待できないことが問題を複雑化、深刻化している。

このような様々な社会的な複合要因が家族に大きく影響しているが、今回は、「地域社会でまると家族を支援する活動」に果敢に取り組み始めている先駆者の方々に、低出生体重児や病児の在宅移行、自閉症児・者の生活支援、高齢者虐待予防、更年期の女性のための地域ケアについて、今、何ができるのか、その活動の意図と活動について実際の取り組みを地域社会という視点からご発表いただき、今後の家族看護の活動展開にヒントとパワーを得たいと考えている。